The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	タイ語と日本語の人物呼称の用法に関する対照的研究
Author(s)	ケェンチャック, カノックポーン
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1989, 23, p. 61-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

タイ語と日本語の人物呼称の用法に関する対照的研究

カノックポーン・ケェンチャック

0. はじめに

ことばは，社会や文化を反映する鏡と言われている。また，ことばはそれを用いる人の人間観を映し出すとも言われている。特に，日常生活の言語行動にみられる呼称語彙は人間の行動様式，相互関係，社会性などの特徴を最も顕著に反映するものである。

本論では，人物呼称を重要な社会生活語彙として捉え，タイ語（バンコク語）と日本語（東京語）の話し言葉における呼称の用法，殊に親族名の用法を比較研究することを通して，日本語とタイ語の呼称の用法の違い，及び日本社会とタイ社会の特徴を考えることを目的とする。

1. 人物呼称の定義

本論での「呼称」とは，話し相手に呼びかける場合のみを指すものではなく，より広い意味に捉え，「会話に係わる話し手自身，つまり言語行為の能動的行為者 (Speaker)，話し相手すなわち言語行為における受動的行為者 (Addressee)，また，話し手と話し相手以外の話題となる第三者 (Referent) のうちのいずれかを指示・規定するもの」と定義する。そして，各々の言語行為をそれぞれ自称・対称・他称と分類する。しかしながら，今回の考察では，他称には触れず，自称と対称を中心に比較分析を行

う。なお，対称の用法については，呼格的用法（Vocative Use），及び名詞の代名詞的用法（Pronominal Use）を取り扱う。[1)]

2. 調査の概要

本研究でのアンケートは，1988年8月の上旬から，同年10月の上旬にかけ，東京とバンコクで実施されたものである。調査の項目の選定に当たっては，話し手と話し相手との間の種々の人間関係，両者の間の属性差（社会的な地位差，年齢差，性差），さらには話し手が話し相手を呼ぶ際の心理状態（発話場面）等を考慮した。話し手と話し相手との関係については親族関係（血縁関係及び義理の関係），親族以外の名前既知の関係，見知らぬ人同志の関係，の三つを想定した。親族関係と親族以外の名前既知の関係においては，普段の自称詞と対称詞の用法を見るため，心理的な要因を問題としない場面を設定した。すなわち，親族の場合には旅行に行くかどうかを，名前既知の相手の場合にはパーティーに行くかどうかを尋ねたり，自分の予定を述べたりする場面である。

一方，見知らぬ人との人間関係における発話場面では，専ら呼格的用法に焦点を当てた。その理由は，見知らぬ相手に対しては，普通長い会話をするよりは，短い会話ですませる事が多いと思われるからである。具体的には，道で物を落とした人に注意を喚起するための呼びかけや何か話をする必要がある時，相手の注意を自分の方に向けるために呼びかけるなどの場面を設定した。

インフォマントの条件としては，タイ語の場合，バンコク生まれでバンコク育ちであり，日本語の場合は，東京生まれで東京育ちであることとした。インフォマントの年齢は，男女とも，10代から60代までの範囲内に設定した。また，人数に関しては，タイで42名（男性19名，女性23名），日本で40名（男性16名，女性24名）の回答が得られたため，両国の男女のイ

ンフォマントの総計は82名となった。

なお，便宜上，以降は姓を LN (LAST NAME)，名前を FN (FIRST NAME)，愛称を NN (NICKNAME) と称する。また，インフォマントを inf. と略称する。

3. タイ語と日本語の呼称用法の比較

3.1 親族関係における自称と対称

比較点A ── 血族と姻族に対する親族名の用法

自称の比較

表1と表2に示されているタイと日本の inf. による自称の用法を見比べると，次の相違点が指摘できる。

1．日本語には，目上に対し自分のことを親族名（つまり弟，妹，娘など）で呼ぶ習慣がないのに対し，タイ語には，その様な習慣がある。しかし，今回の調査の結果によれば，父母に対し，自分のことを lûug（子），他の上世代の親族に対し，lǎan（甥，姪，孫）と呼ぶと答えた inf. は6％しかいない。この事実は，タイ社会において，自分が相手にとって目下の親族にあたることを明示するような自称の用法が衰える傾向にあることを示している。

2．タイの inf. の殆どは目下を相手とする際，血族か姻族かまたは子供か大人かを問題とせず，常に自分のことを親族名で捉えている。すなわち，大人同志の弟妹，義理の弟妹，年下のイトコに向かって phii (older sibling)，子供と子供の配偶者に対し，phɔ̂ɔ（父），mx̂x（母）と自称したりするのである。この様な自称の用法を考えると，タイ人は常に親族間の上下関係を重視するが，血族と姻族の区別はしない。つまり内部と外部といった親疎意識に基づく区別を持っていない様に思われるのである。また，傍系血族であるイトコが兄弟姉妹と同じ様にみなされる点も，自称の

表1　血族に対する親族名の用法

	タイ語	比較ケース	日本語
	自称 ⟷ 対称	ADDRESSEEの属性	自称 ⟷ 対称
目上	◉ ■ ⟷ ▲ ▲(6)	祖父母、父母	■ (93) ⟷ ▲ ◉
		伯父・伯母 叔父・叔母	■ ⟷ ▲(87) ◉
	◉(80) ■ ⟷ ▲(70) ◉	兄姉	■ ⟷ ▲(87) ◉ ◉
	◉(80) ■ ⟷ ▲	年上のイトコ	■ ⟷ ◉ ▲(13)
目下	▲(80) ■ ⟷ ◉ ▲(10)	弟妹	■ ⟷ ◉
	▲ ⟷ ◉	年下のイトコ	■ ⟷ ◉(76) ◉
	▲ ⟷ ▲(54) ◉	子供	■ ▲(31) ⟷ ◉
		孫	■ ▲(31) ⟷ ◉(87) ◉

＊枠内の数字はインフォマントの回答(%)である。

▲ 親族名　■ 人称代名詞　◉ 名前　◉ ニックネーム

表2　姻族に対する親族名の用法

	タイ語	比較ケース	日本語
	自称 ⟷ 対称	ADDRESSEEの属性	自称 ⟷ 対称
年上	⊙(80) ■ ⟷ ▲	義兄・義姉	■ ⟷ ▲(79) ◒/◎
年上	▲(48) ⊙(32) ■ ⟷ ▲(52) ⊙	義弟・義妹	■ ⟷ ◒/◎
同年輩	⊙(70) ■ ⟷ ⊙	義兄・義姉	■ ⟷ ▲(65) ◒/◎
同年輩		義弟・義妹	■ ⟷ ◒/◎
年下	⊙(70) ■ ⟷ ⊙ ▲(22)	義兄・義姉	■ ⟷ ◒/◎ ▲(35)
年下	▲(92) ■ ⟷ ⊙ ▲(24)	義弟・義妹	■ ⟷ ◒/◎
年下	▲ ⟷ ⊙ △(41)	子供の配偶者	

＊枠内の数字はインフォマントの回答(％)である。

▲ phɔ̂ɔ (父), mɛ̂ɛ (母)　　▲ phîi (older sibling), お兄さん, お姉さん

▲ nɔ́ɔŋ (younger sibling)　　△ lûug (off-spring)

■ 人称代名詞　◒ 姓(LN)　◎ 名前(FN)　⊙ ニックネーム(NN)

用法からうかがわれる。[2)]

これに対して，日本の inf. の場合には，血族の相手には親族名を用いるものの，傍系血族と姻族には一般に人称代名詞を用いている。表1並びに表2から，日本の inf. の場合，子供や孫に対しては，親族名で自称することがあるが，目下の姻族（子供の配偶者等）に対しては，人称代名詞でしか自分のことを表現していない傾向を見せている。この様な血族と姻族の区別を反映する自称の用法は，タテ軸の上下関係と関連するものと言うよりは，むしろ心理的距離に関わるヨコ軸のウチとソトの区別に直接的に繋がる問題であると思われる。なお，目下の血族に対し，お兄ちゃん，おばさん等の親族名で自称する習慣は，日本語にもあるが，日本語におけるその様な自称は固定化されてはいない。というのは，目下の血族が年をとると，その様な自称をやめ，人称代名詞で自称することになるからである。この様な自称の変化は，恐らく，年齢の変化あるいは社会的な役割の変化，話し手と話し相手の社会的な地位差の変化等が原因となって生起するものであろう。

対称の比較

親族名での対照の相違点は，基本的には自称の用法上の違いと似ている。すなわち，次のような相違点が認められるのである。

1．日本語は，目下の親族を，妹，息子，孫といった親族名で呼ぶ習慣がない。これに対して，タイ語では，その様な対称の用法が可能であり，さらにそれは血族の相手に限られるものではなく，姻族の相手に対しても有効である。具体的に言えば，表1と表2に示されている様に，タイの inf. の場合，子供と子供の配偶者に lûug（off-spring）を用いる人の割合は，それぞれ54％と41％であり，弟妹と義理の弟妹に nɔ́ɔŋ（younger-sibling）を用いる人の割合は，それぞれ10％と24％である。この様な対称の用法からも，タイ人が血族と姻族の区別をしない傾向がうかがえる。

なお，タイ人が常に目下に親族名を用いるという事実は，自分が目上で，相手が目下であること，つまり親族内の目上・目下の対立をタイ人が常に意識していることを反映するものであると考えられる。また，この様な用法は，話し手が目下への愛情を表すための呼び方であるとも考えられよう。

2．タイの inf. は，年齢差があまり大きくない兄姉の場合を除き，一般に年上の親族（つまり上世代の親族，兄姉，年上のイトコ，年上の義理の兄姉及び年上の義理の弟妹）に対しては，目上の親族名を用いる。つまり，タイ人は親族内の地位による上下関係よりも，むしろ実際の年齢差による上下関係の方を重視するようである。一方，日本の inf. の回答には，タイの inf. との違いが明確に現れている。すなわち，日本の inf. は，年下の義理の兄姉や年上のイトコや年上の義理の弟妹には，目上の親族名を用いていないのである。この事実は，日本の inf. が，タイの inf. とは逆に，実際の年齢差よりも，親族内の地位差による目上・目下の関係を呼称選択の条件として重視していることを示すものである。

ところで，既に述べた親族名での自称と対応して，日本社会では，話し手が成人に達するまでは，目上の親族を普通親族名で呼ぶが，年を経るにつれて，できる限りその様な呼び方をしなくなるようである。その理由としては，親族名での自称の変化の場合と同様，話し手の年齢や社会的地位が変化することが考えられる。この点がタイ語と多少違うところである。

以上，タイ語と日本語における血族と姻族に対する親族名の使用について比べてみた。日本語とタイ語に共通するのは英語等のヨーロッパ諸言語とは異なり，親族関係における親族名使用が，目上と目下で峻別され，両社会の厳格な上下の構造を見事に映し出しているところである。ただし，タイ語の方が，自称にも対称にも年齢差の原理に従って親族名を積極的に用いるという点で，上下関係による規制がより強いということができる。一方，異なる点としては，日本語に見られる親族名の使用に関する血族と

姻族との区別があげられる。日本語では，身内である血族に対しては親族名で自称したり対称したりすることが多いのに対し，外部から身内になった姻族に対しては，親族名で自称したり対称したりすることが割に少ない。この様な血族と姻族の区別を反映する呼称は，タテ軸の上下関係に連なるというよりは，むしろ心理的な距離のあるヨコ軸の親疎関係に直接的に繋がる問題であると思われる。

比較点B ── 配偶者に対する親族名の用法

ここでは，タイ語と日本語の夫婦間の親族名使用を比べた結果を述べてみたい（紙数の関係で比較の表は割愛する）。

まず，大きな相違点として注目されるのは，タイ語では，配偶者に対し，普段キョウダイ間に用いる親族名（つまり，phîi とnɔ́ɔŋ）で呼称することもあるということである。具体的に言えば，タイ社会では，妻が年上の夫と話す時，夫のことを phîi と呼ぶことや，夫が年下の妻に向かって自分のことを phîi と呼ぶことが普通なのである。しかし，この様な呼び方は，年齢差のある夫婦の場合にのみ見られるという点に留意したい。さらに，夫の方が年上である場合に多い。それゆえ，この事象はタイの夫婦が互いにキョウダイの様に扱う姿勢を示す言語行動だと考えるよりも，むしろタイ社会における年齢差の重視を反映するものと見なした方が良いと思われる。また，次項目で述べることだが，タイでは，年齢差のある親族以外の仲間にも親族名を用いる。従って，年が違う恋人間（一般に2〜3歳以上の差）に，phîi とnɔ́ɔŋという親族名を用いることも普通である。そのため，結婚後もその様な呼び方が継続されることが多く，殊にそれは子供がいない若い夫婦に多い。

さて，タイ語と日本語に類似する点としては，子供が生まれると配偶者に対し，親としての役割を示す親族名を用いるようになる点である。具体的には，タイ語の場合，夫が妻に対し mɤ̂x（母）と呼んだり phɔ̂ɔ（父）

と自称したりする一方，妻が夫に対し，phɔ̂ɔ と呼んだり mx̂x と自称したりすることもある。しかしながら，日本語の場合には，配偶者に対し親族名を用いるが，自分のことは人称代名詞つまり，「アタシ」，「オレ」，「ワタシ」などで把握することが多い。要するに，タイ語と異なり，配偶者に対する自称には，親族名を用いない傾向が認められるのである。ただし，個々で設定した発話場面の条件に関しては，双方の inf. は類似した呼称現象を見せている。すなわち，両国の inf. は，同じく子供がわきの聞き手として発話の場所にいる時には，積極的に親の役割を示す親族名で呼び合うが，子供が発話の場所にいない時にはその様な呼び方はあまりしないという点で共通しているのでいる。

以上の様な親の役割を示す親族名使用上の共通点から見て，タイ語と日本語では，英語などのヨーロッパ諸言語とは異なり，夫婦間においてはその役割を強調する呼称が用いられる傾向にあると言えるのではなかろうか。つまり，夫婦は，殊に子供が発話の場所にいる際，呼称を手段とし，互いの親の役割を強調すると同時に子供の方にも親子の上下的役割の差を認識させようとしていると考えられる。とりわけ，自称にも対称にも積極的に親族名を用いるタイ語の方が，日本語よりも子供の存在を意識しながら，夫婦が親としての役割を強調していると考えられよう。

3.2　親族以外の関係における自称と対称

比較点A ── 名前既知の者に対する親族名の用法

自称の比較

ここでは，親族名の使用を中心に，タイ語と日本語における仲間や知り合いに対する自称を比べることにする。

調査の結果から，日本語では，名前既知の仲間，知り合いにおいてごく僅かな親族名での自称が見られるだけであるのに対し，タイ語では，自称にかなり広範な親族名使用が見られることがわかる。これが，両語におけ

表3　親族以外の名前既知の者に対する親族名の用法

	タイ語		比較ケース	日本語	
	親	疎	属性	親	疎
年上	■ ⊙ ↔ ▬	■ ↔ ▬	担任の教師	■ ↔ ▬	
	■ ⊙ ↔ ▲(37) △(8) △(8) ▬	■ ↔ ▬ ■	隣の医者・教師	■ ↔ ▬ ◒	■ ↔ ◒
	■ ⊙ ↔ ▲(13) ▬ ⊙		上司	■ ↔ ◒ ▬	
	■ ⊙ ↔ ▲		先輩・職場の同僚・兄姉の親友	■ ↔ ◒	
	■ ⊙ ↔ ▲	■ ⊙ ↔ ▲(65) △	親友の父母	■ ↔ ▲(37) ◒ △(26)	■ ↔ ◒ △(20)
	■ ⊙ ↔ △		父母の先輩	■ ↔ ◒ △(37)	■ ↔ ◒ △(13)
	■ ⊙ ↔ ▲		父母の後輩		
同年輩	■ ⊙ ↔ ■ ⊙	■ ⊙ ↔ ⊙ ■	同期生	■ ↔ ⊙ ◒	■ ↔ ◒
			職場の同僚	■ ↔ ◒	
年下	▲(47) ■ ↔ ⊙ ◒	▲(37) ■ ↔ ⊙	部下	■ ↔ ◒	■ ↔ ◒
	▲ ↔ ⊙	▲(70) ■ ↔ ⊙ ◒	後輩・職場の同僚・弟妹の親友	■ ↔ ◒	
	▲(47) △(8) ▲(25) △(10) ■ ↔ ⊙	▲(47) △(8) ▲(20) △(10) ■ ↔ ⊙ ■	近所の中学生	△(5) ◒ ↔ ■ ⊙	■ ↔ ◒

＊枠内の数字はインフォマントの回答（％）である。

▲ phîi (older sibling)

▲ khun phɔ̂ɔ（お父さん），khun mɤ̂ɤ（お母さん）お父さん、お母さん

△ khun lug, lug（伯父さん）
khun pâa, pâa（伯母さん）

△ khun aa, aa（父方の叔父さん・叔母さん）
khun náa, náa（母方の叔父さん・叔母さん）

△ おじさん、おばさん

▲ nɔ́ɔŋ (younger sibling)

■ 人称代名詞　◒ 姓　⊙ 名前　⊙ ニックネーム　▬ 職業名・役割名

る大きな相違点である。しかしながら，この様な人間関係においては，双方ともに親族名の虚構的用法[3]がみられる点で共通している。

相違点についてさらに詳しく見てみよう。表3に示されているように，タイの inf. は，全員年下の仲間や知り合い（つまり後輩，同僚，近所の中学生そして弟妹の親友）に対し，親族名を虚構して自称する。すなわち，後輩，年下の同僚等を相手にする際，それぞれの相手を年下のキョウダイ（弟妹）の様に見なし，phîi という親族名で自称する。また，近所の中学生と話す際には，自分と相手との年齢差を基準に，phîi, luŋ（父母の兄），pâa（父母の姉），náa（母の弟妹），aa（父の弟妹）等の親族名を自称詞として使い分けるのである。これに対し，日本での回答では，近所の中学生と話す時に，虚構的親族名，つまり「おじさん」と「おばさん」で自称する例しか見られない。

以上のことからタイ社会は日本社会より親族名の虚構的用法が広範に発達していると言えよう。その背景には，タイ社会特有の，実際の年齢差の重視，つまり年上の人物への配慮及びタイ人の間の疑似親族意識という二つの大きな要因が関与しているものと考えられる。[4]

ところで，年上及び同年配の相手に対し，双方の inf. がいかなる自称詞を用いているかを見てみると，日本の inf. は全員，社会的地位差，親疎意識，自分の性を条件とし，多様な人称代名詞を使い分けるのに対し，タイの inf. は，日本の inf. と同一の条件及び年齢差の条件を基準としながら，固有名（専ら，NN＝ニックネーム）と多くの人称代名詞を使い分けることがわかった。ただし，固有名での自称使用として一般に見られる現象というのは，女性及び20代以下の男性が，親しいか親しくしたい年上の仲間や同年輩の仲間，知り合いを相手とする時，NNで自称するというものである。

タイ語の仲間・知り合いの関係における自称の用法は親族関係における

それとかなり似通っている。この言語現象は，タイ社会の身内・他者の区別を意識しない傾向を裏付けるものとして注目される。

対称の比較

調査の結果によれば，対称の用法は自称の用法の比較から明らかになった相違点と殆ど一致している。つまり，対称に関しても，タイ語では，日本語より広範な親族名使用が見られるのである。なお，表3のタイ語の場合，親族名の使用は，年上と年下の相手にのみ多く見られる。この事実は，タイ語の場合，親族名で呼ぶ話し相手としては，ある程度親しいものの同年輩ではない仲間や知り合いが該当することを示している。つまり，学校や職場の仲間，親族の友達，友達の親族等，相互の社会的な地位差のあまり大きくない知り合いという属性を持つような人物でなければならないのである。

これに対して，日本語の場合，その様な属性を持った人物は普通家と家の区別を示す固有名，つまり姓敬称付けで捉えられている。しかしながら，親族名の虚構的用法がごく僅かながら日本語にも見られる。しかし，それは，自分と親しい間柄である両親の親しい友達，友達の両親のような人物に限られるのである。

また，この様な関係において，固有名の用法にもタイ語と日本語の大きな相違点が見られる。というのは，タイ語では，姓（ＬＮ）を呼称に用いる習慣がなく，名前（ＦＮ）とニックネーム（ＮＮ）の使い分けも不分明である。まず，ＬＮを呼称にしない理由に関して言えば，双系的親族組織のタイ社会は，もともと身内と他者との区別をする機能を持つＬＮまたは家名の使用を知らなかったのである。現在のＬＮの使用は，公的な記録によると，タイ国では1916年にワジラーウッド王（King Rama VI）の命によって父系のＬＮ（nam sakun）を名乗るようになったと言われている。ただし，現在でも，ＬＮは呼称として用いられない。

次に，ＦＮとＮＮの使用について，まず上下関係によるタブー性の問題を考えよう。普通は，目上に対しては地位名や職業名等の対称詞を用いるが，社会的な地位差の大きくない目上には，有指標のＦＮの使用，例えば，ＦＮ敬称付け等も許される。要するに，上下関係の要因に支配されるタイ語のＦＮの方が日本語のＦＮより使用の範疇が広いように思われる。

ところで，親疎関係によるタブー性に関して今回の調査の結果から言えることは，日本語では，心理的距離の有無またはウチとソトの意識によるＬＮ，ＦＮ，ＮＮの使い分けが明確であるのに対し，タイ語では，ＦＮとＮＮの使い分けが不分明であるということである。タイ語の場合，普通は親しいか親しくしたい，あるいは親しくなる見込みのある様な仲間，知り合いに対し，ＮＮが用いられる。また，フォーマルな場面以外では，同一の学校，職場，活動団体，旅行の団体といった集団のメンバー間にも，普通はＮＮが用いられる。

以上，親族以外の名前既知の間柄における自称と対称の用法を比較してきた。明らかになったのは，タイ語と日本語における呼称の相違点が，タイ社会の特徴である年齢差の重視や他者を疑似親族と見なす習慣等を反映すると同時に，日本社会の特徴である内部と外部の峻別という人間観を浮き彫りにしているという点である。

比較点Ｂ――名前未知・見知らぬ者に対する親族名の用法

呼びかけの比較

表４に示されているように，名前未知・見知らぬ者への呼びかけにも親族名を用いる点が，タイ社会と日本社会の共通の習慣である。しかしながら，表４の数字からも明らかなように，タイ社会における親族名の使用の方がかなり広範である。その理由としては，タイ人の親族名使用が専ら実際の年齢差によって規定される虚構的用法であるのに対し，日本人の親族名使用は，すべて世代差によって規定される親族名の世代階梯語的用法で

表4　名前未知・見知らぬ者への呼びかけ

タイ語	比較ケース	日本語
呼びかけ	ADDRESSEEの属性	呼びかけ
■	5－7歳の幼児	◧
▲ (73), ■	中学生	■ , ◧(75)
▲ (62), ■	大学生らしい人	◧
▲ (13), ■	20代のサラリーマン・OLらしい人	◧
▲ (76), ▬	20代の魚屋の主人	▲(37), ◧ , ▬
▲(51), ■ , ▬	20代のバスの運転手	◧ , ▬(72)
▲(51), ■ , ▬	20代の郵便配達屋さん	▲(5), ◧ , ▬
▲(89) ■ , ▬	20代のボーイ・ウェートレス	▲ (3), ◧
▲(29), ■	40代の金持ちらしい人	▲ (5), ◧
▲(59), ■	40代の駅の掃除の人	▲(10), ◧
▲(32), ▬ , ■	40代の警察官	◧(70), ▬
▲(76), ▬	40代の魚屋の主人	▲(37), ◧ , ▬
▲(51), ■ , ▬	40代のバスの運転手	◧ ▬(72)
▲(89), ■	40代のボーイ・ウェートレス	◧
▲(81), ■	良い服装をしている老人	▲(5), ◧
▲(84), ■	古い服装をしている老人	▲(13), ◧

＊　枠内の数字はインフォマントの回答（％）である。

▲ 親族名　■ 人称代名詞　▬ 職業名・役割名

◧ 感動詞・挨拶表現　◧ その他（ボク、オジョウサン）

あることがあげられる。つまり，10代〜50代のタイの inf. は，相手の年齢を推測し，自分の親族と見なすことによって疑似親族関係を想定し，それぞれに適切な親族名で呼びかけるのである。例えば，28歳の inf. は，中学生と大学生には nɔ́ɔŋ (younger sibling)，40代のバスの運転手さんには nâa（母の弟妹），65〜70歳の男女の老人にはそれぞれ luŋ（父母の兄），pâa（父母の姉）と呼びかけると答えた。一方，日本の29歳の inf. は40代の魚屋の主人にそれぞれ「おじさん」，「おばさん」と呼びかけると答え，37歳の inf. は20代の魚屋の主人にそれぞれ「お兄さん」，「お姉さん」，40代の駅の掃除係にそれぞれ「おじさん」，「おばさん」と呼びかけると答えた。つまり，日本の inf. は，自分との間に疑似親族関係を想定せず，むしろ相手が属する世代（例えば，青年，壮年，実年，老年）を示す親族名で呼びかけるのである。

さて，表4からも明らかなように日本の inf. は親族名よりもむしろ感動詞・挨拶表現の方を多く用いる傾向にある。例えば，「モシモシ！」や「スミマセン」や「アノウ・・・」等の表現である。また，子供には「キミ」という人称代名詞を用いたり，職業名を有する相手にその職業名を用いるという回答もあった。

一方，タイの inf. の場合には，親族名を用いない，または用いられない（例えば，自分との年齢差が推測できないような見知らぬ人に呼びかける場合など）時に，khun, thəə, nǔu といった人称代名詞を使い分けたり職業名を使ったりする。しかし，日本語との相違点として最も注目されるのは，見知らぬ人に呼びかける際に，タイの inf. は感動詞・挨拶表現を全く使わないという点である。

以上のように，名前未知・見知らぬ者の関係における呼称の用法においてもタイ語と日本語との間にはかなりの違いが見られる。こうした違いの分析から，タイ語の呼びかけ方は，仲間・知り合いの関係におけるそれと

同様，タイ社会の年齢差への配慮及びタイ人が持つ疑似親族意識という二つの大きな要因によって支配されていると見なすことができる。一方，日本語の呼びかけ方では，疑似親族関係が想定されず，世代階梯語的親族名や話し手と話し相手との相互関係を明示しない感動詞・挨拶表現が多く用いられる。要するに，日本社会では，名前未知・見知らぬ者に対しては親しみをこめた呼びかけ方がなされにくく，むしろある程度の心理的な距離を置くような呼称を用いる方が一般的な言語行動だと考えられているようである。

4. おわりに

今回は，感情の要因を示す場面については省略し，親族名の用法の比較を中心に考察してきた。この結果が両語の呼称体系の全体像を浮き彫りにしているかどうかについては問題もあるが，両語の呼称体系における大きな相違点や両社会の特質等は一部明らかにすることができたと思う。概して言えば，両語の呼称は，話し手と話し相手の人物属性差，つまり，年齢，社会的地位・役割及び上下関係，親疎関係といった要因に支配されている。なお，日本では身内と外部とを峻別する意識が強いため，親族名と固有名の使用範疇が狭いのに対し，タイでは，疑似親族意識が強いため，親族名と固有名の使用範疇が広い。また，話し手の人物属性においては，社会的地位は両社会で共に重んじられるが，年齢に関しては，双方の親族名使用の相違からして，日本では世代差が重視されるのに対し，タイでは年齢差が重要視されることが明らかになった。

注

1) 呼称的用法（Vocative Use）は，話し手の注意を自分に向けさせたい時や相手に感情を訴えたい場合などに用いられる。すなわち，話し手が相手とコミュニケーションを始めるために話し相手に呼びかけることである。

一方，「代名詞的用法」は，欧米の一部の人類学者によれば，ある文の主語又は目的語として用いられることばを指したものであるが，内容的には話し相手を指し示す二人称である。

2) 綾部氏（1971）もこの現象を指摘し，次のように述べている。

「Pi-nong の使用範囲は広く，親族以外でも親しいもの，同世代の友人などに適用されることが多い。例えば，われわれアジア人は兄弟だというような表現にも pi-nong が使用される。したがって，またこの言葉は傍系親族としてのイトコにも自由に広大使用されているのである。」

3) 鈴木氏（1973）は虚構的用法に関して次のように記述している。

「実際には血縁関係のない他人に対し，親族名称を使って呼びかけることを，人類学では親族名称の虚構的用法（FICTIVE USE）と言っている。（中略）虚構的用法の一般原則は，話し手が自分自身を原点として，相手がもし親族だったら自分の何に相当するかを考え，その関係にふさわしい親族名称を対称詞又は自称詞に選ぶのである。」

4) タイのこのような疑似兄弟姉妹的関係について，岩田氏（1965）は次のように述べている。

「また，タイ族社会の持つ，もう一つの特質として友人関係の重視ということを附言しておきたい。親しい友人に対しては，血縁の兄弟に対するごとき相互依存感をいだくこと，そこに兄弟関係 phi nong kan の拡張をみとめることは頗る重要なことのように思われる。」

参考文献

Adler, Max K: Naming and Addressing: A Sociolinguistic Study. Helmet Buske Verlag Hamburg, 1978.

綾部恒雄『タイ族 ── その社会と文化』弘文堂，1971

Befu, Harumi and Edward, Norbeck: Japanese Usage of Terms of Relationship, Southwestern Journal of Anthropology, Vol. 14, 1958.

Braun, Friederike: Terms of Address: Problems of patterns and usage in various languages and cultures. Mouton de Gruyter, Berlin, New York, Amsterdam, 1988.

Cooke, Joseph R.: Pronominal Reference in Thai, Burmese and Vietnamese. California: University of California Press, 1968.

Fischer, J. L.: Words for Self and Others in Some Japanese Families. American Anthropologist, Vol. 66. No. 6, 1964.

Haas, Mary R.,: Sibling Terms as Used by Marriage Partners. In

Language, Culture, and History, ed. by Anwar S. Dil, Stanford University Press, 1978.
岩田慶治「タイ系諸族における家族，親族および親族名称 ―東南アジア調査資料拾遺―1―」『人文研究（大阪市立大）16（8）』P 1～19, 1965
鈴木孝夫「人を表すことば」『ことばと文化』岩波新書，1973
渡辺友左『各地方言親族語彙の言語社会学的研究』国立国語研究所報告64, 1979

付記

本論は，1988年度に大阪大学大学院文学研究科に提出した「日本語とタイ語の話しことばにおける人物呼称体系の社会言語学的比較研究」と題する修士論文の一部である。

（大学院後期課程学生）